

平成18年度香小研国語部会研究テーマ

1 平成18年度の研究テーマについて

(1) 研究テーマについて

国語力の見極めとその指導・評価の在り方を求めて 考える力を育てる学びの構築

平成17年10月26日付で、中央教育審議会は「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」を出した。この中で、「国語力はすべての教科の基本となるものであり、その充実を図ることが重要である。」と、述べられている。

この文言からは、国語力が各教科の学びにおいて非常に重要な力であること、そして、国語力の向上が、国や県の教育施策の中心に掲げられてくるであろうということが理解できる。具体的にどんな力が、また、どのような結び付きをもって、すべての教科の基本となるのかは明確にはされていないが、これまでの国語科で育成すべき「国語科として育成すべき力」のとらえにも、広がりや深まりを考慮していかなければならないという課題が浮かび上がってくる。

そこで、国語力を定義している文化審議会答申(平成16年2月3日)「これからの時代に求められる国語力について」を読み返してみたい。ここでは、まず「国語の果たす役割と国語の重要性」を、母語としての国語という観点から、「個人にとっての国語」「社会全体にとっての国語」「社会変化への対応と国語」という3点に整理されている。

「個人にとっての国語」
知的活動の基盤を成す
感性・情緒等の基盤を成す
コミュニケーション能力の基盤を成す
「社会全体にとっての国語」
国語は文化の基盤であり、中核である
社会生活の基本であるコミュニケーションは国語によって成立する
「社会変化への対応と国語」
価値観の多様化、都市化、少子高齢化などの進展と国語
国際化の進展と国語
情報化の進展と国語

これをまとめて、「国語力は、個人の自己形成に関わり、社会を維持し発展させる基盤となり、様々な社会変化やそこから引き起こされている様々な問題に柔軟に対応していくために重要である。」と述べられている。

では、この国語力の実体はどのようなのであろうか。国語力は、以下のように大きく2つの領域に分けてとらえられている。

考える力，感じる力，想像する力，表す力から成る，言語を中心とした情報を処理・操作する領域	国語力の中核
考える力や，表す力などを支え，その基盤となる「国語の知識」や「教養・価値観・感性等」の領域	の能力の基盤となる国語の知識等

【考える力】とは，分析力，論理構築力などを含む，論理的思考力である。
分析力は，言語情報に含まれる「事実」や「根拠の明確でない推測」などを正確に見極め，さらに，内在している論理や構造などを的確にとらえていける能力である。また，自分や相手の置かれている状況を的確にとらえる能力でもあり，知覚（五感）を通して入ってくる非言語情報を言語化する能力でもある。
論理構築力は，相手や場面に応じた分かりやすく筋道の通った発言や文章を組み立てていける能力である。
【感じる力】とは，相手の気持ちや文学作品の内容・表現，自然や人間に関する事実などを感じ取ったり，感動したりできる情緒力である。また，美的感性，もののあわれ，名誉や恥といった社会的・文化的な価値にかかわる感性・情緒を自らのものとして受け止め，理解できるのも，この情緒力による。
さらに，言葉の使い方に対し，微妙な意味の違いや美醜などを感じ取る，いわゆる「言語感覚」もここに含まれる。
【想像する力】とは，経験していない事柄や現実には存在していない事柄などをこうではないかと推し量り，頭の中でそのイメージを自由に思い描くことのできる力である。また，相手の表情や態度から，言葉に表れていない言外の思いを察することができるのも，この能力である。
なお，物事を考え，感じ，想像することにより，言語を中心とする情報の内容を正確に理解できることから言えば，上記の「考える力」「感じる力」「想像する力」をまとめて，【理解する力】と位置付けることもできる。
【表す力】とは，考え，感じ，想像したことを表すために必要な表現力であり，分析力や論理構築力を用いて組み立てた自分の考えや思いなどを具体的な発言や文章として，相手や場面に配慮しつつ展開していける能力である。

で挙げられている4つの能力は，互いに関連し合っている。例えば，表現する時にも，「考える力」「感じる力」「想像する力」を使う。「感じる力」として述べられている文学作品の内容・表現を感じ取る場合にも，論理的，分析的な読み方は必要なのである。文学作品における人物の心情についても，状況や立場の認識がベースとなってその読み取りができるものである。さらに，感覚は，論理の獲得や言語経験を通して研ぎ澄まされていくのでもある。また，平成18年度の学習状況調査の結果でも，やはり「考える力」に課題があることが指摘されている。

このように，で表された国語力の中核となる能力の中でも，「考える力」を，まずもって育成していくことが重要であると考えられる。そこで，平成18年度は，「国語力の見極めとその

指導・評価の在り方を求めて」というテーマは継続し、研究の視点を絞りサブテーマを「考える力を育てる学びの構築」とした。

(2) 考える力について

「考える力とは、分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力である。」と述べられている。分析力を主に理解するという側面で使い、論理構築力を表現するという側面で使っていると考えられる。この2つの力が指し示しているのはほぼ同じものであると判断できる。「分析力は、言語情報に含まれる『事実』や『根拠の明確でない推測』などを正確に見極め、さらに、内在している論理や構造などを的確にとらえていける能力である。」と定義されている。つまり、学習指導要領に示されている読むこと低学年の順序性、中学年のまとまりや段落の関係等もこれに含まれる。「論理構築力は、相手や場面に応じた分かりやすく筋道の通った発言や文章を組み立てていける能力である。」と定義され、「分かりやすく筋道の通った」を砕いていくと、読むことの指導事項と重なるのである。

また、文学作品においては、描かれている状況を的確にとらえたり、作品全体の構成をとらえたりするといったことは分析力になると考えられる。

特筆すべきは、「自分や相手の置かれている状況を的確にとらえる能力でもあり、知覚（五感）を通して入ってくる非言語情報を言語化する能力でもある。」という点である。

これまでの国語科における思考力は、言語を中心に扱った連続型テキストをもって育成すべきものという考えがあった。しかし、PISA調査の結果からも明らかのように、世界水準の読解力のとらえは、図や表を含む非連続型テキストの読み取りにまで広がっている。高度情報化の現在において考えてみても、映像等の非言語情報と言語を併せ持った情報が世の中には多くなってきている。

さらに、平成17年12月に文部科学省から出された「読解力向上プログラム」においては、PISA型「読解力」育成の重要性や視点が述べられている。この中では、各学校で求められる改善の具体的な方向として、「テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実」、「テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実」、「様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実」が重点目標として掲げられている。

これらのことを考えると、国語科の理解や表現における力は、これまでの基礎・基本を徹底することに加えて、以下のような力も育てていく必要がある。

- ・ テキストに書かれた「情報の取り出し」だけではなく、「理解・評価」（解釈・熟考）も含んだ力としてとらえておくこと
- ・ テキストを単に「読む」だけではなく、テキストを利用したり、それに基づいて自分の意見を論じたりする「活用」も含んだ力としてとらえておくこと
- ・ テキストに書かれている「内容」だけではなく、構造・形式・表現法も評価すべき対象とすること
- ・ 文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけではなく、図、グラフ、表などの「非連続型テキスト」もテキストとして考えておくこと

つまり、これまでの「読む力」と「書く力」の関連はもちろんのこと、特に、「考える力」との関連を重視していく必要があると考えられる。また、言語内容と言語形式を併せもっている言語を対象とする国語科としては、この両面の指導を行わなければならないとした学習指導要領の趣旨を尊重しなければならない。

さらに、図やグラフといったものからの「読み取り」や「活用」についても考えていかなければならないのである。

ただし、国語科の範疇では、以下のように「非言語情報を言語化する」または、「非言語情報を統制する言語の使用の在り方について」を中核に置くべきであるとする。

【非言語情報を言語化する例】写真や図等から情報を抽出する・解釈する
絵を見て、分かることを言語化して表現する。(既に低学年の言語活動例にはある)
図を見て、分かることを言語化して表現する。
絵や図の視点を明確にして言語化して表現する。

【非言語情報を統制する例】写真や図の情報を言語で統制して再構成する
叙述と絵とを結び付ける。
写真や絵にタイトルをつける。
複数の写真を集めてタイトルをつける。
効果的な図や絵の活用を考える。

(3) 全ての教科の基本となる国語力について

平成17年10月26日付で、中央教育審議会は「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」を出した。この中で、「国語力はすべての教科の基本となるものであり、その充実を図ることが重要である。」と、述べられている。

では、どのようなことが「すべての教科の基本となる」のであろうか。「すべての学習で、ことばを使って表現したり、ことばによって理解したりするから。」あるいは、「すべての学習で、話す・聞く、書く、読むといった言語活動を行うから。」と、いう答えでは満足できないだろう。

この答えを、追究していくことで、「国語力」のとらえも明らかになると考える。

曖昧さを鮮明にする「ことば」

社会科の授業の一コマ

「スーパーマーケットの見学をして分かったことを教えてください。」

この教師の働きかけに対して、

「スーパーマーケットはすごいなあと思いました。」

と、ある子どもが発言した。教師は「もっと詳しく話して」あるいは、「そう思ったわけを教えてください」と、さらに発言を促す。

「すごい」というのが、この子どもの結論であり真実ではある。しかし、それに整合する具体的事象、または、事象間の関係性をどうとらえたかという、いわば根拠を述べなければ学習集団にも、教師にもこの子どもの考え方や認識が伝わらない。したがって、教師は、このように、発言を促すのである。

これは、単なるコミュニケーション不成立の解消という問題だけではない。「すごい」に結び付いた具体的事象、または、複数の事象間の関係性のとらえこそが、社会科で育成すべき大切な力なのである。もし、この子どもが、そこを意識していなかったとしたら、「もっと詳しく」「わけは」ということばは、この子どもの社会的な思考を促したことになる。

「わけを付けて」「まとめて」「詳しく」「例を挙げて」という述べ方は、当然ながら国語授

業で育成すべき学び方であり，論理的な述べ方の言語形式なのである。

具体を抽象化する「ことば」

生活科の授業の一コマ

「それぞれのお仕事で，工夫したことを教えてください。」
この教師の働きかけに対して，
「くつを洗う時には，歯ブラシを使うと細かい所まできれいになるよ。」
「花瓶がなければ，空き瓶にアルミはくをまくといいよ。」
と，子どもたちの発言が続いた。
「2人は，同じ工夫をしているよ。」
と，いう教師の発言に対して，
「リサイクルしている。」
「何か代わりになるものを探したよ。」
と，子どもたち。

「2人は，同じ工夫をしているよ。」の代わりに「2人ともよく工夫したね。」と言っていたらどうであろう。靴箱がいっぱいで入りきらない時に，子どもは，箱を使って段を増やすといった発想ができるだろうか。また，教師は，どのように工夫したらよいか分からずに困っている子どもに，発想を促す視点を，適切に助言できるだろうか。工夫するとは，「何か代わりになるものを探したらいい」「逆にしてみたらいい」「伸ばしたり縮めたりしたらいい」等といった視点から発想し，試行錯誤していくことではないのだろうか。様々な場面に転移・活用ができるためには，歯ブラシ，空き瓶，アルミはくといった具体的なものを増やすのではなく，工夫の視点を一般化したことばを生み出すことが重要である。

複数の具体を比較・整理することで，様々な場面に通じる「理」や「概念」を，ことばで一般化し，それを転移・活用していくこと。これこそが，真の学びであると考え。学んだことを「タイトル化・インデックス化」して子どもの脳内に蓄積し，必要に応じて引き出していくことができるようにすることである。もちろん，このことは，生活科に限ったことではない。全ての学習において言えることなのである。当然，国語授業では，ことばをまとめて，上位概念のことばにする力も育成しているのである。

国語授業の学びが直接生きる場面

国語授業での学びが，直接，他教科・他領域の学びに深く結び付いている一例について考えたい。

写真や絵を使っている場面

総合的な学習の時間等，様々な学習場面で写真や絵を使って説明をする活動を見かける。写真や絵は，ことばとは比較できないくらいの情報量をもっている。「百聞は一見にしかず」のように，分かりやすいというメリットがある。しかし，その情報量の多さによっては，かえって学習の中心内容に焦点化ができない場合もある。子どもたちにプレゼンテーションをさせた場合は，この傾向が顕著になる。

低学年国語科の言語活動例には，「絵から想像をふくらませる」「絵にことばをつける」といった内容の言語活動例が示されている。この言語活動を通して，ことば以外の情報をことばに変換したり，ことばを用いて焦点化したり，視点を明らかにしたりするといった「ことばを核として情報を統制する」力をつけておけば，これらの学習の深まりが期待できるのである。

(4) 研究の切り口について

研究の切り口については、昨年度までの「目標レベル」「単元レベル」「学習指導・評価レベル」と、「常時活動・トピック単元の開発」を踏襲したい。そして、各レベルを貫く視点として「考える力の育成」の視点を貫いていきたい。また、それぞれのレベルの内容においは、他教科の学びにつながる触手を伸ばす視点からも考えていきたい。

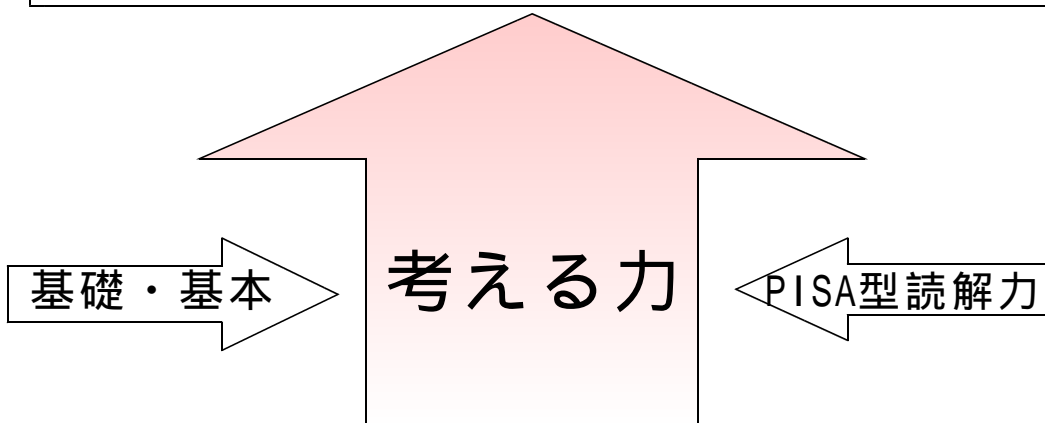
目標レベル

単元・教材レベル

学習指導・評価レベル

常時活動・トピック単元の開発

論理的思考力・想像力・言語感覚・読書・言語事項・メディア活用等



【考える力】とは、分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力である。

分析力は、言語情報に含まれる「事実」や「根拠の明確でない推測」などを正確に見極め、さらに、内在している論理や構造などを的確にとらえていける能力である。また、自分や相手の置かれている状況を的確にとらえる能力でもあり、知覚（五感）を通して入ってくる非言語情報を言語化する能力でもある。

論理構築力は、相手や場面に応じた分かりやすく筋道の通った発言や文章を組み立てていける能力である。

2 研究内容

研究テーマ

国語力の見極めとその指導・評価の在り方を求めて

考える力を育てる学びの構築

具体的・系統的な国語力の設定

目標レベル

「国語力」の具体的・系統的なとらえ直し
 学習指導要領に示されている指導事項をより具体的にとらえる。そして、
 低学年・中学年・高学年の系統性を考慮した目標を設定する。
 「発達段階に応じた国語力」としての具体的・系統的なとらえ直し
 幼稚園と小学校の接続，小学校と中学校との接続も視野に入れた目標の吟味を行う。
 3つの領域間の目標の関連性に着目した「国語力」
 領域間にまたがる関連指導可能な具体的・系統的な目標を設定する。
 各教科の基本となる「国語力」
 各教科の基礎となり，各教科の学びの確立に生きる目標を具体的・系統的に設定する。

単元・教材レベル

目標レベルを受けた言語活動研究・教材研究
 言語活動における子どもの実態と育成する国語力の分析
 ある言語活動を展開することで，子どもたちは教材をどう受けとめ，どのような力を，どのように身に付けていくのかを明らかにする。
 学年の系統性を重視した言語活動配列の視点研究
 同一，または同系列の言語活動の発展性と培いたい力との関係は何かを明らかにする。
 領域間の関連，国語力の育成のための言語活動展開の研究
 領域間の関連を図る単元展開とはどうあればよいのか，1単元の言語活動の展開において，ある力を習熟していくまでの単元展開とはいかにあるべきかを明らかにする。また，「読むこと」「書くこと」の定着に指導の重点を置いた言語活動の設定も重視していく。
 「国語力」を育成する教材研究
 教科書教材の何に着目すべきか，どのような手順で教材研究を進めるのかを明らかにしていく。

学習指導・評価レベル

目標レベル・単元レベルを受けたきめ細かな支援・評価の在り方
 子どもの課題意識からの指導内容・学習活動の設定
 コミュニケーション不成立の場面を取りあげて，その解決のためには，どうすればよいのかを考えていく等，子どもの課題意識・目的意識を大切に活動を設定する。
 言語形式が明確になり，その有効性が確認され，整理される支援の在り方
 言語形式の有効性を実感できる活動を組み，活用・転移する場を設定する等，教師が培いたい力と子どもが身に付けていこうとする力が一致し，子どもたちがその力を確実に身に付けることができるようにする。
 子どもの反応を組織する等，教師の指導の在り方
 子どもへの反応に潜在する価値を顕在化させたり，子ども相互の関わり合い，評価力を高めたりする，教師の具体的な指導力の向上を図る。
 個に応じた国語力を育成する評価の在り方
 単元・学習指導の評価規準及び，評価方法を明確にした評価計画を作成し，一人一人を確実に評価し，支援へと生かしていく。

常時活動・トピック単元の開発

朝活動の在り方，授業におけるトピック単元の開発を行い実践を交流する。
 (論理的思考力・想像力・言語感覚・読書・漢字・メディアの活用等)

3 研究方法

各都市がそれぞれの視点をもって研究し，以下においてその成果と課題を交流し，さらに研究を深めていく。

また，平成18年度香小研国語部会研究発表会の会場校である国分寺北部小学校の研究の視点や内容を深く理解し，これに寄り添った研究を進める。

平成18年度の夏季研修会

日時 平成18年7月28日（金） 9：00～16：00

場所 香川県県民ホール多目的大会議室

平成18年度香小研国語部会研究発表会（国分寺北部小） 11月10日（金）

平成18年度第23回四国国語教育研究大会（愛媛大会） 11月22日（水）

第2学年の提案・・・「読むこと」 高松ブロック（高松，木田，香川）

第4学年の提案・・・「話すこと・聞くこと」西ブロック（三豊，観音寺）

研究冊子「国語科教育42号」

平成19年2月上旬発行予定

研究委託事業

香川県教育委員会からの平成17年度から2年間の研究委託